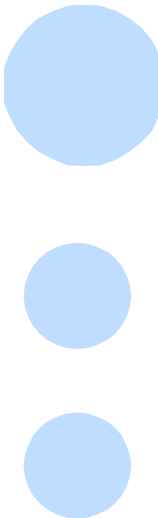


母と子の育った環境

私と息子のジェネレーション・ギャップは私はアナログ式で、息子はデジタル式で育てられたと言う感じでしょうか？ 新米母の私は、病院の授乳室で、母乳を与える前後に赤ちゃんの体重を量り、既定量に達していなければ、哺乳瓶を受け取り、指示通り飲ませる事に違和感を感じる事ありませんでした。子供がお腹一杯になっただかどうかを数字で知るような、この病院のペースが、悲しいかなこの後も続いていく事になってしまいました。

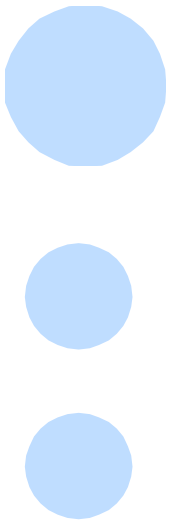
私が育つ過程では、母以外の肉親もその役目を担ってくれたのに対し、息子の場合は肉親ではなく、いわゆる専門家である医師の介入がはるかに多かったという事が悔やまれます。病弱故だけでなく、検診の度、強制的に検査や治療を延々と受ける事になり、それらを心の片隅で何か少し変？と思いつつも、その結果に一喜一憂、振り回され、いつも不安な面持ちの母に育てられたのが我が息子です。大病院の最新機器で繰り返される検査や母子手帳に書かれた成長・発達の基準は息子の健全な成長や幸せに繋るどころか、母子に大きな不安をもたらしただけで、後々まで影響を与えました。私の母の世代が子育てに自信があるとか無いとか意識する事すら無かったのに比べ、私は全く自信喪失、混沌状態でしたがこのような母親は私だけではなかったかも知れません。育児に自信が持てないのは、



私の真面目遺伝子が災いしたのかと自問自答、又周りからそのように非難される事も度々ありましたが、これは、母親や子供個人の問題として捉えるのは酷であり、検診制度や過剰検査にも大きく問題があったように思われます。

子育てに自信を無くすと、私は愚かにも「この年令ではくねばならない」という医師や教師の意見に息子を合わせ育てなければと思うようになっていきました。そういう言葉が繰り返されると、そうする事が子供を社会に適応させる事だと思われ：しかしながら、それは、逆の結果となりました。専門家といえども、多分にその人の主観に過ぎないという事に気づき、認識する事も、反論する事もできず、又何よりも悠然と構える余裕が孤立無援の私には無かったからです。それでも子供の一举手一投足まで見つめているような自分に気づく時もあり、自分が育てられた頃を思い出す事は、時として暴走しそうになる私のブレーキとなってくれました。

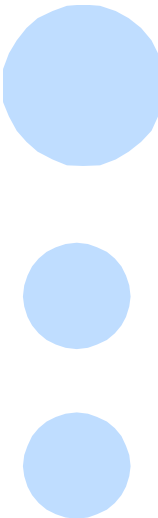
社会に出るのをためらう息子にとって、学校は最初のみならずなりました。私は親に学校は行くよう強いられることはなかったのに息子には行く事を強いてしまいました。そして、私の子供時代には不登校児はいなかったのに今の学校には行けない子がいます。私の学校には“いじめ”の言葉自体が存在しなかったけれども、息子は小学校1、2年の担任自身から筆舌に尽くし難い“いじめ”を受け続け、前思春期（小4）からは、家庭の外で拒食症になり、結局



学校は最後まで苦難の場でした。「学校へ行きたくない」という言葉の中に自分を押し殺しながら通学している息子の現実がある事を私はわかっているようでわかっていなかったから、そのような教師にも対応できるような強い子にしないでと厳しく振るまっていたのです。

困った事は、息子の状態を相談すると、地位のある方から、「そういう先生はいるんですよ。兄弟がいると、『あの先生、変だね』と気づくんですけど…」と、問題があるのは人格に問題がある教師ではなく、一人っ子の息子と母であるように言われる事でした。教育者がどのような人物であれ、教育者に順応できる子供には“みんな違ってみんないい”が適用され、順応できない子供にはそれが適用されない、いびつさと冷たさを息子の学校で感じました。不登校や引きこもりは、学校や教師、親等の誤った対応から生じた問題を現実的な解決方法ととらず、子供一人の心の問題として捉えると起こるようにも思います。

息子は思春期になると、それまでの人との関わりの中で、又自分の気持ちを押し殺す日々の中ででき上がった自分自身を受け入れられなくなりまし
た。自分にラベリングした教師や級友、或るカウンセラー等々、処々の人々（親も若干あるでしょう）に対しての憤りを今は自分一人の力で処しきれない状態で、そこから脱却しようという気力や行動力



が湧いてくるにはまだまだ長い道のりがあるようです。息子が社会から遠ざかっている今、実は私自身も、無理な“ねばならない”束縛から少し解放された気分です。ですから、今のこの状態は決して望ましくはありませんが、この時期は息子には必要なかとも思えます。

セカンド・スペースには私の子供時代の学校の雰囲気があり、息子は「セカンド・スペースのようない所はない、もっと早くに必要だった…」と言っています。今、私にできる事といえば、息子への毒舌を少し控え、羽を休めている我が子を見守りながら、将来、いつか社会へ羽ばたいていってくれるよう、私の母のように、ただ祈るしかないのかもしれないかもしれません。

